

# 中国語文法・語彙の歴史的研究-『水滸』に見られる “得”の用法-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2012-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 守屋, 宏則 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12993">http://hdl.handle.net/10291/12993</a>

中国語文法・語彙の歴史的研究  
——『水滸』に見られる“得”の用法——

守 屋 宏 則

# A historical study of the grammar and lexicon of the Chinese language

— On the usage of “de” in <<SHUIHU>> —

MORIYA Hironori

This paper appears in <<SHUIHU>> analyses the usage of “de” from various perspectives. The structure of Chinese “verb-complement structure” is rather complex, either “word”, “phrase”, or other forms of structures are hard to be recognized.

In “de”, when [V “de” C / V “bu” C] is used or deemed as “potential complement”, the positioning of “object” would be complicated. If “object” becomes either [V “de” C] [V “bu” C] or [V “de” CO], and this it will also become [V “de” CO], based on the characteristic of the “object”. The placement of “object” affects the fluency of Chinese to a large extent in this era.

According to <<SHUIHU>>, if “de” comes only after verbs, the meaning of “de” varies one from another. [V “de”] represents both “perspective” and “potential”. [V “de” C] is the phrase of “potential complement”, becoming the structure of [V1 “de” V2], and forming “V de+manner complement” and so on.

When [V “de”] represents perspective, the applying of [V “de”] and [V “le”] is hard to differentiate, especially when “buceng” and “weiceng” denying verb. The combination of “buceng/weiceng+[V “le”]” is rare but the combination of “buceng/weiceng+[V “de”]” is much more common.

“C” and “V” will either be the same or different, depending on [V “de” C] and [V1 “de” V2], which are hardly to be differentiated and often to be mistaken as “V de+manner complement”. Furthermore, the structure of element after [V “de” C] is not easy to be analyzed.

In recent generations, comparing the frequency of the appearance of [V “de”C] and [V “bu”C], [V “bu” C] is relatively more often. However, in this era the usage proportion of [V “bu”C] is getting larger due to the changes in the environment conditions. It will be a thrill to the territory of Chinese grammar if the explanation of “lexicon” can be more clarified.

## 《個人研究第2種》

# 中国語文法・語彙の歴史的研究

## ——『水滸』に見られる“得”の用法——

守屋 宏 則

### 0 序論

#### 中国語の動補構造について

中国語の動補構造について、主に梁銀峰(2006)に従ってその概要をみてみたい。インド・ヨーロッパ系の言語においては、述語動詞は一つでなければならない。しかもこの動詞の人称、数、テンス、アスペクトなどは確定的でなければならず、もしその他に動詞があれば、それは不定式動詞あるいは動名詞でなければならない。しかし中国語では時間の流れに従って文中に二つの動詞を用いることができ、その場合の第二動詞は第一動詞の結果あるいは方向などを補充説明する。このような動詞と補語の組み合わせは一般に動補構造と呼ばれる。現代中国語においては、述語、述語性フレーズ、介詞フレーズなどが補語に充当され、動作の結果、方向、数量、時間、場所、あるいは性状の程度などを説明する。動詞が結果補語を伴う形式はふつう「動結式」と略称され、「動趨式」と区別される。「使成式」と混同して、結果補語は「使成式」と見なす考え方もあるが、この二つの用語の意味はやはり異なると考えられる。「動結式」と「動趨式」は構造形式について言っているのであって、「使成式」は意味論的な概念であり、両者の分類基準は異なっている。「使成式」という名称は王力の『中国現代語法』で提案されたものである。そしてこの中には他動詞も自動詞も含まれている。王力は後に『漢語史稿』において次のように若干の修正を行っている。「形式上は外動詞が形容詞を伴う(例えば“修好”“弄壞”)か、あるいは外動詞が内動詞を伴う(“打死”“救活”)もので、意味上は行為及びその結果を一つの動詞性フレーズの中で表示している。このような行為が受事者にある結果を与えるものを使成式という」。この考えに基づけば、使成式の第一動詞は他動詞であり、第二動詞の部分は自動詞もしくは形容詞ということになる。補語の語義は受事賓語を指し、構造的意味からは「V1使OV2」とであると理解される。動補構造の性質と分類についていえば、動補構造は中国語文法構造における重要かつ顕著な特徴である。しかし、その構造が複合語であるのか、それともいわゆるフレーズであるのかは決め手に欠ける問題である。王力は『中国語法理論』『中国現代語法』では動補構造をフレーズと見なしているが、しかし『漢語史稿』では「現代中国語においては一部の使成

式は徐々に単語化しつつある」と述べている。朱徳熙は現代中国語においては述補式の複合語もあればフレーズ性の述補構造もあるという考えを示している。しかし、趙元任は二つの構造を認めながらも朱徳熙の考えとは異なる見解を示し、朱徳熙がフレーズと認める例の多くは述補式複合語であると考えられる。趙元任の考える述補構造は、粘着的フレーズ補語構造（すなわちいわゆる介詞構造が補語になるもの）あるいは述語性の補語構造（すなわち“得”を伴う補語）である。このように動補構造がいったい複合語なのかフレーズなのかは複雑な問題である。動補構造は複合語かそれともフレーズか？理論上は単語の形式特徴を概括し、動補構造の形式的特徴に符号するか否かを検証することになる。原則はほぼ確立しているが実行するのは容易ではない。

呂淑湘は多くの意見を総括しておよそ以下のような基準を提唱している。

- (1) 一つの談話から遊離できるものは単語である、しかし全ての単語が遊離できるわけではない。
- (2) 単語は同型のものに代替できるが、しかしすべての単語が相互に代替できるわけではない。
- (3) 単語はそれ以上分解できない、しかし分解できないものがすべて単語というわけではない。
- (4) 一つの単語の中に二つの重音があってはならない。
- (5) 一つの単語の中に軽声の音節があってもよいが、すべての単語中に軽声があるわけではなく、すべての軽声音節が単語でないというわけでもない。
- (6) 単語の内部に停頓があってはならない。しかし二つの単語の間に停頓があってはならないものもある。

以上の基準に照らして呂淑湘は動補構造はフレーズであると考えられる。以上のような基準を考える上で重要なのは形態標識である。形態標識が語と語の分界を示す。しかし中国語の語形標識はきわめて貧弱であり、フレーズの中に現れる語が同じ形式で複合語の中に現れることもある。それゆえ、成分の組み合わせと文字形式から見るだけでは多くのフレーズと複合語は区別がつかないのである。

単語は言語における、最小の、独立して運用される言語単位であるので、一般的に言えば不可分割性を有している。しかし実際には多くの動補構造は拡張性を有している。具体的には次のようになる。

(1) 拡張できないもの。動補構造を構成する「XY」の中間に接中辞の“得”“不”或いはその他の成分を挿入することができない。例えば：

“克服” “革新” “改良” “扩大” “加强” “推翻” “延长” “压缩” “说明” “提高” “削弱” “纠正” などである。

(2) 拡張できるもの。これらはさらに3つのケースに分類できる。

①制限的に拡張できる。

動補構造を構成する「XY」の中間に接中辞の“得”“不”のみを挿入することができる。しかし形式上はやはり2音節構造である。例えば：

“看(得/不)见” “杀(得/不)死” “踢(得/不)倒” “扯(得/不)断” “碰(得/不)伤” “写(得/不)成”。

②自由に拡張できる。中間にその他の成分を挿入でき、後の補語を修飾したり、補語の部分が重ね型になれたりする。例えば：

“吃(得比谁都)饱” “喝(得有八分)醉” “认(不太)准” “煮(得不太)熟” “听(不太)懂”  
 “拉(得有点)长” “长(得非常非常大)” “看(得非常)清楚” “弄(不太)明白” “擦(得)干(干  
 净(净))” “研究(得)清(清)清(楚)” “打扫(得很)干净”

③自由に拡張できる。形式上はやはり2音節構造であるが、①②とは異なり、後に受事や結果補語をとることができない。例えば：

“(坑)挖(得太)浅(了)” “(布)买(得有点)长(了)”。これらの動補構造は、形式上は2音節形式ではあるが、後に目的語をとれないことから「複合語」とは見なさないという考え方もある。

(3)自由に拡張でき、かつ中間にその他の成分を挿入できるもの。(1)(2)とは異なり、後に目的語をとることができない。

例えば：

“摆(得挺)整齐” “关(得)严(严)实(实)”。

しかしこれらは“\*摆整齐桌椅” “\*关严实窗户” のようには言えない。

結局キーポイントは(2)で挙げた2種類の動補構造が複合語か或いはフレーズかということにある。

(2)で挙げた2種類が拡張できるのであれば、すなわち、統語論的規則がこのような動補構造の補語部分に影響を及ぼしているということになる。これらが複合語であるためには以下の二つの条件を満たす必要がある。

①このような動補構造はすべて目的語をとることができる。

②動詞の後綴の“了”“过”は動補構造の後にしかつかず、中間に挿入されることはない。

総じて言えば、動補構造の内部構造と語義分類は次のようになっていると考えられる。まず広義の動補構造は動補型フレーズと動補型複合語に分類される。

前者は目的語をとることのできない2・3・4音節の粘合形式の動補構造であり、“得”“不”を伴う組合形式の動補構造である。後者は狭義の動補構造であり、使成式動補構造と非使成式動補構造に分けられる。

## 1 現代中国語の“得”の意味・用法

現代中国語の“得”にはどのような意味・用法があるか、まずは最も権威ある文法書とみなされている『現代漢語八百詞(増訂本)』を見てみると次のような説明がある。

得1 [助] 連接表示程度或結果的補語。基本形式是“動/形+得+補”。動詞不能重疊，不能帶“了，着，過”。

このように記述した上でさらに9つの小項目に分類して説明する。

- a) 動/形+得+形 表示否定在“得”后加“不”字。
- b) 動/形+得+動 “得”后不能是单个動詞。
- c) 動/形+得+小句

d) 動+得+名+動 “得”后不能是單個動詞。名詞是前面動詞（使動意義）的賓語，這個名詞都可以用“把”字提到動詞的前面去。

e) 一般的動賓短語加“得”時，要重複動詞。

f) 動/形+得+四字語。

g) 形+得+很。

h) 動/形+得。

i) 以上格式的動詞或形容詞前如意思上容許加否定詞，一般限於“別，不要”。

## 得2

〔助〕用於表示可能，可以，允許。

とし，さらに二つに分けて説明する。

a) 動+得。動詞限於單音節。否定式是在“得”前加“不”，動詞不限於單音節。

b) 在動結式和動趨式複合動詞的中間插入“得”或“不”，表示可能或不可能。

現代中国語の“得”について最も網羅的かつ詳細な記述をしているのは『中国語辞典』白水社(2002)である。同書は以下のように記している。

〔得1〕〔助〕1 動詞・形容詞の後に用いて可能を示す。

① (能力・条件・許容という点から)・・・できる

◆ (1) この可能表現は現代語ではあまり用いず，多く“能”“可以”や“得了”を用い，否定には“不得”を用いる。

(2) “觉得”“认得”“记得”“懂得”“晓得”“免得”“省得”“值得”“懒得”“显得”などは単語であつて〔動詞+“得”〕とは見なさない。

⇒ 顾得，舍得，使得

② (道理上許容されるので)・・・できる ◆この可能表現は，一部の疑問文を除き，否定文のみで用い，否定には“不得”を用いる。

2 (〔動詞・形容詞+“得”+結果補語・方向補語〕の形で，結果補語・方向補語が示す事態が客観的に実現し得ることを示し)・・・できる。

◆ (1) この可能表現の否定には“得”の代わりに“不”を用いる。

(2) “能”“可以”を〔動詞・形容詞+“得”+結果補語・方向補語〕の前に用い，可能を強く主観的に主張することがあるが，その場合疑問文として使うと，多く反語文や強い疑いを含んだ問いになる。

(3) 一部の動詞，特に方向や移動を示す動詞をこの可能表現に用いると多様な転義を有する。

〔得2〕〔助〕〔動詞・形容詞+de補語(‘得’+形容詞・動詞・句・節)〕の形で用いる；……

1 de補語が動作・行為・変化・発展や性質・状態の程度・様式などを示す。

2 de補語が動作・行為・変化・発展の結果を示す。

3 [動詞・形容詞 + de 補語] は動詞・形容詞が示す動作・行為・性質・状態の実現や存在を前提とし、それに対し程度・結果といった側面から説明を加えるものであるから、動詞・形容詞そのものが否定されることはありえないが、時に形式上 [動詞・形容詞 + de 補語] 全体に否定がかぶさり、意味的には de 補語に否定が及ぶ。

## 2 近世白話中国語の“得”の意味・用法

《宋元语言词典》はいわゆる虚詞の“得”を語彙項目として取り上げていない。“的”は語彙項目として取り上げてあるが、「的 (一) 同“得”。(用例省略) (二) 衬词, 无意。(用例省略)」と記すのみである。

《水滸词典》は“得”“的”“地”を峻別せず、きわめてわかりにくい記述になっているが、整理するとおよそ以下のようなになる。

【得】1 dé 要【得】2 dé 使, 使得【得】3 dé 有【得】4 dé 幸亏得【得】5 dé 才【得】6 dé 已【得】7 dé 到【得】8 de 相当于动态的助词“着”【得】9 de 用在动词后边表示动作已经完成【得】10 de 相当于动态的动词“过”【得】11 de 用在及物动词之后, 宾语补语结构之前, 表示能够【得】12 de 与否定副词“不”连用, 用在动词之后, 宾语补语结构之前, 表示能够做到【得】13 de 用在动词之后, 动词的宾语之前, 与动词前否定副词“不”联合, 表示不能够【得】14 de 与动词之后, 补语宾语结构之前, 与动词前否定副词“不”联合表示不能够

このように、現代中国語における“得”の文法機能的用法と、近世白話中国語における“得”の文法機能的用法との間にはかなりの相違があることがみてとれる。

現代中国語においても、また近世白話中国語においても、述語と補語の結合体であるところの「述補構造」にはさまざまな文法上の問題が含まれている。以下、概ね、蔣紹愚氏の論述に従って概観してみる。

中国語における「述補構造」は、およそ次のような体系をなしていると考えられている。

	動詞 + 単独動詞	動詞 + 形容詞
	肯定 否定	肯定 否定
述語 + 方向補語	进来 没进来	A
述語 + 結果補語	染成 没染成	染红 没染红
述語 + 状態補語	B	染得红 染得不红
述語 + 可能補語	染得成 染不成	染得红 染不红

この体系において、A B はいわゆる「あきま」である。また「述語 + 可能補語」の肯定形と否定形は、一見対称に見えて、実は非対称である。なぜなら、中国語における否定



形は、一般に肯定形の動詞または形容詞の前に“不”もしくは“没”を加えるが、「述語+可能補語」の否定形は、“不”が肯定形の“得”にとって代わるという方式になっているからである。この非対称性について、蔣紹愚氏は、「“V不C”、“VO不C”型の由来は、“得”が省略されたのではなく、“呼之不來、揮之不去”の如く、旧來この形があった」とする呂叔湘氏の説を認め、歴史的には、“V得C”よりも“V不C”が先に発生したと論じているが、さらに検討が必要であろう。

また、“得+ [目 (的語)]”と“V+ [目] +不得”の非対称性についても、前者の“得は「動詞の後にあって動作の実現もしくは生じた結果を表す“得1」であり、後者の“得は「動詞の前にあって可能を表す“得2」”が“不得”となって動詞の後に置かれたものであると解釈している。

この考えに従うと、次のような歴史的変化が考えられる。

得1                      得2

唐代    V得 [目] (実現)    V [目] 不得  
          V得 [目] (可能)

宋代    V得 [目] (実現)  
          V得 [目] (可能) → V不得 [目]

### 3 『水滸』における“得”の用法

『水滸』に現れる“得”を含む用例を統語論的観点と意味論的観点から個別に分析・考察し、その問題点を検討したい。

使用したテキストは『容輿堂刻水滸傳』であるが、諸般の事情により一部の字体は日本漢字のそれを以って置き換えたものもある。

文中、Vは動詞、Cは補語、[目]は目的語を表す。

まず、[V“得”C]がいわゆる可能補語の肯定形式であると認め得るものの条件を考えてみたい。例えば“……只留得員外身留不得員外心(員外の身は留め得ても員外の心は留め得ない)”の下線部“留得”“留不得”は広義的可能補語と見なせるであろう。

“扒得上岸の盡被小撓鈎搭住活捉上山去了扒不上岸的盡淹死在溪裡(ようやく岸に這い上がった者はことごとく手下たちの鈎手にひっかけられ、生け捕られて山上に連れ行かれ、這い上がれなかった者はことごとく溪中に溺れ死んだ)”の下線部“扒得上”“扒不上”を狭義的可能補語と見なす。

次に“老娘他和知県来往得好……(おっかさん、奴は知県と深い仲で～)”“那白秀英打得腦漿迸流眼珠突出動憚不得情知死了(かの白秀英は脳味噌がこぼれ眼球が飛び出し～)”の下線部“好”“腦漿迸流眼珠突出”はいわゆる様態補語であると見なす。

不殺得張都監，如何出得這口恨氣！

(張都監の奴を殺せなければ，この恨みを晴らすことはできない！)

“不殺得”の“殺得”は可能を表すと考えられる。“如何出得……”の“出得”も可能を表し，全体は反語の語気を表している。

這李逵却是……，朱仝如何趕得上。……朱仝恨不得一口氣吞了他，只是趕他不上。

(この李逵ときたら～，朱仝には追いつけるはずもない。～朱仝はひと飲みにくれようとしたが，李逵には追いつけない。)

この“趕得上”と“趕不上”はこの時期の可能補語の典型的特徴を備えていると考えられる。肯定形式は反語の語気で用いられ，否定形式の人称代詞の目的語は[V + [目] + “不” + C]のようにVの後の位置にある。

また，“吳用道：『你作起神行法來，誰人趕得你上？』”(吳用が言った。「あなたが神行法を使えば，誰も追いつけなんでしょう。」)に見られるように，肯定形式の“趕得你上”では目的語の人称代詞“你”が[V + “得” + [目] + C]の位置にある。

那後槽那里忍得住，……

(その馬丁は我慢ならず，～)

この“忍得住”は現代語にも通じる可能補語である。

【動詞 + “得/不” + “住”】は『水滸』にはかなり多く見られるが，相対的に肯定形は多くなく，その場合も多くは反語の語気で用いられている。

また稀に“載宗道你敢是昨夜不依我今日連我也走不得住”の“走不得住”のような用例も見られる。

武松道…『恁地，却饒你不得。』

(武松は言った。「それではお前は生かしてはおけん。」)

“V不得”には禁止を表す場合と「～することができない」という不可能を表す場合があり，この例は後者であろう。目的語が人称代詞“你”で[V + [目] + “不得”]という語順になっている。

武松在胡梯口聽，只聽得蔣門神口裏稱讚不了。

(武松が二階の上り口で聞き耳をたてると，蔣門神がお世辞たらたらとごたくを並べているのが聞こえた。)

この“稱讚不了”は，可能補語の“V得了”の形式と同一であるが，反義の“稱讚得了”は想定し難い。また「～しきれない」という可能の意味は読み取り難い。

『水滸』全体を通じて“V不了”の形はきわめて少なく，特に可能を表すものは少ない。

武松那里挣扎得脱。

(武松はもがくも逃れられない。)

この“挣扎得脱”は、可能の意味で理解される。また、現代語には“V得脱”という可能補語はないであろう。“V得C, V不C”のCに動詞“脱”が用いられる例は『水滸』では10例近く見出すことができる。現代中国語の可能補語との差異の一つと言えるであろう。この例は肯定形もやはり反語の語気で用いられている。

武行者過得那土岡子来, ……。

(武行者は峠を越えて来ると, ～。)

移動を表す動詞が[V + “得” + [目] + “来/去”]のVに用いられているものの多くは可能の意味を表さず、一種の連動構造になっていると考えられる。

原来這個牛子独自個背些包裹, ……，因此拿得来, 献与大王做醒酒湯。

(この野郎は一人旅で包みを背負い, ～, ひつとらえて来て酔いざましの汁にしてあげましょう。)

この“拿得来”は形式上は“V得来”と同じであるが、可能補語の肯定形であるとは認め難い。他にも“左右, 興我推得来。(ものども, ひつたてて参れ。)”という例は他の版本では“推将来”となっていて、“得”と“将”がほぼ同じように使われている例も少なくない。

劉高喝道：『胡説！你們若不去奪得恭人回来時, ……。』

(劉高はどなった。「黙れ！お前たちが行って奥方様を奪い返して来なければ, ～。」)

却得這許多人来, 拾奪得我回来。

(この連中が来て, 私を奪い返して来てくれたのです。)

この2つの例で、“奪得恭人回来”と“拾奪得我回来”は可能補語ではなく、一種の連動構造であると考えられる。『水滸』においては[V + “得” + [目] + 複合方向補語(に見える形)]の形になっているものの多くは、可能補語というより、やはり一種の連動構造であると考えられる。

さらに“便問恭人道：『你得誰人救了你回来？』”(奥方に尋ねた。「誰がお前を助けて戻って来たのか?」)という例があり、これら三つの例が内容的には同一であるところから考えても、二つの“V得”はほぼ“V了”に近いと考えられる。

……，奪了七八十疋好馬不曾逃得一箇回去。

(～, 7, 80頭の良馬が奪われて逃げおおせたものは1人もなかった。)

この“逃得”は“不曾”で否定されており、語順から考えても“逃得回去”という可能補語に目的語の“一箇”が加わっているとは考え難い。

しかし、“你既是引了青州五百兵馬都投了, 如何回得州去?”(～～どうして州に戻れようや。)の“回得州去”の“回得去”の“得”は可能を表し、場所を表す目的語の“州”が“得”と“去”の間に位

置していると考えられる。同一の形式に見えても可能補語と認め難い場合をそうでない場合がある。

また、“便做你輸了被擒，如何五百軍人沒一個逃得回來報信？”（～，500の兵卒のうちただの一人も逃げ戻って知らせる者がいないのはなぜだ？）では“沒一個逃得回來”となっており，語順と形式と意味から可能補語と認めることもできる。

……，已從濟州大牢裏越獄，逃得到了山上入野。

（濟州の大牢を脱獄し，山に逃げて来て仲間入りしたのだ。）

“逃得到了山上”は[V + “得” + “到” + “了” + 場所目的語]という形式であり，このような“得”は実現とも可能とも連動とも解釈し得る。

便把公人扛出前面客位裏來，把解藥灌將下去，救得兩個公人起來。

（さっそく役人達を表の客間にかつぎ出して来て，醒まし薬を注ぎ込んで，2人の役人を助けて立たせた。）

現代中国語の観点から見ると，もしこの“救得兩個公人起來”が可能補語であるならば，目的語の“兩個公人”は複合方向補語“起來”の間に割って入って“救得起兩個公人來”という語順になるのがふつうである。従って“救得兩個公人起來”の“得”は“了”とはほぼ同義で，一種の連動構造になっていると考えられる。

這箇人只除非是院長說得他下。

（この男は院長さんでなければどうにも手に負えないでしょう。）

この“說得下”は可能補語であると考えられる。『水滸』では“V得下”のように“V得C”のCに方向補語“下”が用いられている例は多くない。“說得他下”のように[V + “得” + [目] + C]の語順になっているのは目的語“他”が人称代詞だからである。否定形式の場合は“忘了日前之恩如今也顧他不得。（昔の恩を忘れても今は奴のことをかまっていられない）”のように[V + [目] + “不得”]や“連為幾頭官司開封府也治他不下。（～開封府も彼を治められない）”のように[V + [目] + “不” + C]のという語順になる。また“鄧龍那厮和俺厮併又敵酒家不過。（鄧龍の奴はわしと闘ったがわしにはかなわなかった）”で“敵酒家不過”のように[V + [目] + “不” + C]の語順になっているのは，“酒家”が一般名詞ではなく人称代詞だからである。

……，纔飲得兩盃酒過，只聽樓下喧鬧起來。

（～，2, 3杯の酒を傾けたその時，階下に騒がしい物音が聞こえた。）

『水滸』には“V得過”・“V不過”の例は多く見られるが，“得過”・“不過”の解釈には注意が必要である。

放在営内，不曾帶得來。

(牢城の方に置いてあって、持って来てはおりません。)

この“帶得來”は意味から見ても、また“不曾”によって否定されているところからも、可能補語ではなく、“得”は一種の達成・実現を表すと考えられる。

石秀道：『哥哥，你若抬得來時，只散在半山案下了轎。』

(石秀は言った。「兄貴，(轎で) かつがれて行くのなら，かならず中腹あたりで轎を下りてください。』)

この“抬得來”は可能補語ではなく、一種の連動構造であると考えられる。また、同じ“抬”という動詞が使われている例で、“如何得知有大虫在園裏？使又抬得過？(どうして虎が屋敷の中にあることを知っているのか？それをどうしてかついで行くものか？)”の“抬得過”も連動構造であると考えられる。

“快去尋得二哥寄家來說話。(早くうちの人を探して、用事があるからと言って連れておいで。)”の“尋得二哥家來說話”は、命令を表す文に用いられていることから見ても可能補語とは考えにくい。また“尋得孫新歸來，興樂和相見。(孫新を探して帰って来て、ひき合わせた。)”も可能補語とは考えにくい。ともに一種載連動構造であると考えられる。

好箇祝家莊，尽是盤陀路。容易入得來，只是出不得。

(好箇の祝家莊，尽く是れ盤陀の路，容易に入り得來たるも，只是れ出で去れず。)

“入得來”と“出不得”が対になって用いられている。“出不得”は可能補語の否定形式である。従って“入得來”は可能補語の肯定形式であると考えられる。『水滸』に現れる“V得來”の例を一概に連動構造とみなすことができないのは、このような例があるからである。

“孫新道：『……，我去定請得來。』(孫新は言った。～，必ず呼んで来るからな。)”の“請得來”は連動構造であると思われるが、しかし、可能の意味が読みとれなくもない。

当下不由李応，杜興不行，大隊軍馬中間，如何回得來。

(その時李応，杜興はどうしようもなく，多くの人馬の中にあつて，どうして帰って来られようか。)

同じ“V得來”という形ではあるが、文意から見ると、この“回得來”は可能補語であると考えられる。肯定形式が反語の語気で用いられている。

戴宗道：『……，慢慢地却得三五年方纔回得來。』

(戴宗は言った。「～，ゆっくりと4，5年もかかってやっと戻って来られるのだ。』)

この“回得來”には可能の意味を読み取ることができる。『水滸』においては可能補語の肯定形式の多くが反語の語気で用いられ、また多くの場合、副詞“纔”，“方纔”の修飾を受けるという特徴が見られる。

次後吃拷打不過，只得招道：……。

(やがて拷問に耐えきれなくなり、ついに白状した。)

この“拷打不過”は形式上は反義の“拷打得過”が想定できる。従って可能補語の一種とも考えられる。しかし、“拷打”が“吃”に後接され、しかもこの“吃”は当然「食べる」という意味の動詞ではなく受け身を表す“吃”であることから、“拷打不過”は“拷打” + “不過”という構造であって可能補語ではないと考えられる。

小人一時心慌，要趕程途，因此不曾看得分曉。(私はその時あわてており、日程が気がかりで、それではっきり見られませんでした。)

この“看得分曉”は一種の様態補語であると考えられる。また“不曾”で否定されていることから見ると、“得”は一種の達成・実現を表すとも考えられる。“……，未曾問得你箇仔細。(～，まだその方にくわしいことを聞かずにいた。)”では同様に“未曾”で否定されているが，“得”の後が“你箇仔細”という体言性成分なので様態補語ではなく、達成・実現を表すと考えられる。

「……。」敲得門開，我自有擺布。

(門をたたいて開けさせたら、あとは私がやる。)

“敲得門開”は[V + “得” + [目] + C]の形であるが、この形式は宋代には多く見られるが元代以降はきわめて少ない。“V得開”“V不開”は現代語でも一般的な可能補語であるが、この用例の文意からは可能の意味は読み取り難く、一種の様態補語であると思われる。

“V得開”の扱いには注意が必要である。例えば“孫立嘆了一口氣，說道：『你衆人既是如此行了，我忠地推却得開？』(孫立は嘆息して言った。「あんたたちがどうしてもやると言うなら、わしも断わるわけにはいくまい。)」の“推却得開”の“開”は「開く」という実義は薄く、結果補語としての機能に近いと思われる。文意からみて肯定形式が反語の語気で用いられている可能補語であろう。また“……都被林冲簾住了推也推不開。(～林冲に押さえられていて押せども開かなかった。)”の“推不開”は可能補語の否定形式で、Cに“開”が用いられており、なお「開く」という実義が生きている。また、“你若剥得開時我還你三千貫。(もしぶった斬ることができれば3000貫やろう。)”の“剥得開”は可能補語で、“開”は結果補語的である。

李達道：『我也困倦的要不得。』

(李達が言った。「俺だって疲れて眠くてたまらねえよ。」)

“困倦的”の“的”は“得”の通用字である。すなわち“困倦得要不得”の初めの“得”は様態語を導く“得”で、その後の“要不得”が様態補語になっているものである。

李達看看捷得到嶺上，松樹辺一塊大青石上，把娘放下。

(李達はやがて嶺の上にとどり着くと、松の木の側の大きな青石に母親をおろした。)

この“捷得到”は形式上は典型的な可能補語の肯定形式であるが、『水滸』では“V得到”の用例は多くない。この用例中の“捷得到”は可能の意味が薄く感じられる。一種の連動構造と考えられる。反義の“V不到”も微妙である。例えば“兩箇戰不到五合……（両者は5合も戦わずして～）”の“戰不到”は“行不到”“闘不到”などと同様に可能補語ではないと考えられる。

また“若要去時須用船去方纔渡得到那里（もし行きたければ船でなければそちらに渡ることはできない）”の“渡得到”は[“渡得” + “到那里”]という構造であると考えられる。

這小大虫被擗得慌，也張牙舞爪，鑽向前采。

（小虎は突かれて驚き，牙をむき，爪を立てて飛びかかってきた。）

この“擗得慌”は文脈の意味からも，また受動を表す“被”に後接している点からも，可能補語ではなく，様態補語と考えるのが妥当であろう。

『……，只是在這裏安不得身了。』『……，須在此安身不得。』

（「～，しかしここにはいられなくなる。」「～，とてもここにはいられまい。」）

『水滸』には“安你不得”“安他不的”“安不得人”という用例が見られる。目的語の位置の違いは目的語の性質の違いによるものである。この用例の“安不得身”“安身不得”のような目的語の浮遊に注意しておきたい。

走得快的走了，走得遲的就擗死在地。

（足の速い者は逃げ，足の遅い者は刺し殺された。）

この“走得快”“走得遲”は文中の意味から見て様態補語であると考えられる。単音節形容詞が様態補語になる例は他にもいくつか見られる。

楊林便問道：『兄長使神行法走路，小弟如何走得上？』

（楊林は聞いた。「あなたが神行法を使って行くのに，どうして私がついて行けるはずがありませんうや。」）

この“走得上”は肯定形が反語の語気で用いられており，意味から見て可能補語であると考えられる。“V得C”のCに“上”が用いられる可能補語は『水滸』には多く見られない。

戴宗……喝采道：『你等二位，如何来得到此？』

（戴宗は感嘆して言った。「お2人はどのようにしてここへ来られたのですか？」）

この“如何……？”は反語ではなく，“どのようにして？”という疑問を表しており，“来得到此”は「ここに来ることができた」という意味であるが，しかし，“来得到”が“V得到”という可能補語とは認め難く，“来得” + “到此”という一種の連動構造と考えられる。

戴宗道：『這般時節認不得真。』

(戴宗が言う。「当節はまともなことが通りません。」)

現代語では“認真”の“認”と“真”が分離して用いられることはあまりないが、『現代漢語詞典』に[認真]rènzhēn ① (-/-) [動] ……と記されているように動詞的用法の“認真”は離合詞に属するものである。それゆえ可能補語は“認不得真”という形になるのである。また“老漢年紀高大，熬不得夜。”(わしは年をとって、夜ふかしはできません。)のような例も“熬夜”が離合詞であることが一目瞭然で、このように離合詞XYが[X + “不得” + Y]の形になるものはいくつか見られる。

海閣黎道：『娘子休笑話。怎生比得貴宅上。』

(海閣黎は言った。「ご冗談を。お宅とはくらべものになりません。」)

現代語の自然な語順では、“比得貴宅上”の目的語の位置は“上”の後であろう。目的語の位置が比較的自由であった時期の特徴がうかがえる用例の一つであろう。

両箇再飲了幾盃，……，一同下樓來。出得得酒肆，各敬了。

(2人はさらに何杯か飲み、～、一緒に降りて来て、店を出て別れた。)

この“出得得”は非常に珍しい用例であるが、版本によっては“出得”となっている。意味から考えても、並行例がないことから見ても“出得”が正しいのではないだろうか。

他雖一時聽信了這婦人說，心中怪我，我也沒分別不得，。

(彼はうっかり女を言うことを信じて俺を責め、俺も申し開きができなかったが、～。)

この“分別不得”は“V不得”が“没”で否定されている稀少な用例である。現代語では[“没”+ V]が未完了・未実現を表すが、『水滸』においては“没”で否定される動詞の例はまったくないか、またはあってもほんの2, 3例である。この差は版本の違いによるものである。

老子摸得起来，摸了兩手血跡，叫声苦不知高低！

「爺さんが手で探してみると、両手にべっとりと血がついたので、悲鳴をあげてうろたえた。」

この“摸得起来”は連動構造とは考え難い。「手探りをして起き上がる」という連続する動作がこの文脈に合わない。しかし「手で探してみると」でも“得”の意味の説明が難しい。文脈から見て可能補語であるとも考えにくい。他の版本が“爬”に作るのが正しいのかも知れない。

……，聽得說是箇女將，指望一合便捉得過來。

(～、女將軍と聞いて、ただの一合で捕えてくれようとした。)

この“捉得過來”は可能補語ではなく、一種の連動構造であると考えられる。しかし、この用例のすぐ後に“原来王矮虎初見一丈青，恨不得便捉過來。(そもそも王矮虎は初めて一丈青を見て、「すぐ捕えてくれようと思った。）」という例があり、この例では“得”がなく、“捉得過來”と“捉過來”



の違いが微妙である。

雷横道：『今日忘了，不曾帶得些出来。』

（雷横が言った。「今日は忘れた，いささかも持ち合わせておらん。」

この“帶得些出来”は“不曾”で否定されていることから，また文意からも可能補語ではなく，一種の連動構造であると考えられる。すぐ後にある“我一時不曾帶得出来，……（うっかり持って来なかったので，～）”の“帶得出来”も連動構造であろう。

李達……，說道：『他直恁般做得起！』

（李達は～，言った。「あいつはなんであんなにいばってやがるんだ！」

この“做得起”という例はわずかにこの1例のみである。“V得起”の形も非常に少ない。“……只是眼睁睁地看着楊志沒箇掙扎得起。（…しかしきよろきよろと楊志を見るだけで，もがいて起き上がれる者はいなかった）”の“掙扎得起”は「もがいて起き上がる」という可能補語であろう。前にある“沒”は未完了・未実現を表すものではなく，“有”の反義の“沒”である。

吳用道：『你作起神行法來，誰人趕得你上？』

（吳用が言った。「あなたが神行法を使えば，誰も追いつけないでしょう。」

“趕得你上”は単音節人称代詞“你”が目的語となり，[V + “得” + [目] + C]の語順であり，肯定形が反語の語気で用いられている。

『這人必是個打鉄匠人。山寨裏正用得着。』

（この男は鍛冶屋にちがいない。ちょうど山の砦で使えるだろう。）

この“用得着”は文意からみて可能補語であると思われる。副詞“正”の修飾を受けている点に注意が必要であろう。“不如日後他拏得着時却再理會。（後日如らを捕まえることができしてから考え直すしかない。）”では，肯定形式の“拏得着”が平叙文に用いられている。“着”の読音はともに zháo であろう。また“……，正張得着都看在肚裏了。（～，ちゃんと見張っていてすべて腹におさめていた）”の“張得着”は副詞“正”に修飾されている興味深い用例である。

#### 4 まとめ

紙幅の制約上、小稿で取り上げた“得”に関連する用例は『水滸』中の用例全体の一部に過ぎないが、用例分析によって得られた『水滸』に現れる“得”の用法上の特徴について簡述する。まず“得”が動詞に後接して「達成・実現」を表すものがある。この場合“得”は一種の時態助詞の機能を果たしていると考えられる。その点で“了”と重なる部分があるが“不曾”“未曾”で否定される時に“得”が消えないという点は“了”と異なる。また前接する動詞には一定の傾向が見られるが、“了”に前接する動詞との違いは分明ではない。“得”が動詞に後接して「可能」を表すものがある。この場合、動詞の意味には一定の特徴が見られ、多くは「獲得」の意味を表すものが多いという傾向がある。また“得”が動詞に前接して「可能」を表すものもあるがこれは古漢語の用法のなごりである。“V不得”は「禁止」を表すものは少なく、多くは「不可能」を表す。“V得C”は可能補語と考えられるものと、“C”が実は補語ではなく一種の連動構造であると考えられるものがあり、形式だけで弁別することは難しい。“得”の後に様態補語が導かれるものもあるが、様態補語になる成分は多様で現代語とも若干の違いが見られる。“V得C”“V不C”と目的語との位置関係は目的語の種類によって浮遊する現象が見られる。これは現代語でも方言にみられる特徴と関連している。

#### 【主要参考文献】

- 太田辰夫 (1958) : 『中国語歴史文法』, 江南書院  
 王 力 (1958) : 『漢語史稿』(中冊), 科学出版社  
 楊 建 国 (1959) : 『補語式発展試探』『語法論集』(第三集), 商務印書館  
 劉 月 華 (1980) : 「可能補語用法的研究」『中国語文』1980年第4期, 中国社会科学出版社  
 大河内康憲 (1980) : 「中国語の可能表現」『日本語教育』41号, 日本語教育学会  
 香坂順一 (1983) : 「近世中国語の“得”」『東洋研究』第65号, 大東文化大学東洋研究所  
 岳 俊 発 (1984) : 「“得”字句の産生和演變」『語言研究』1984年第2期, 華中工学院語言研究所  
 陳 浩 (1984) : 「《水滸全伝》“得”的詞義初探」『語文研究』1984年第2期, 山西省社会科学院  
 古屋昭弘 (1985) : 「宋代の動補構造“V教(O)C”について」『中国文学研究』第十一期, 早稲田大学中国文学会  
 香坂順一 (1987) : 『《水滸》語彙の研究』, 光生館  
 香坂順一 (1988) : 「《水滸傳》に見られる能願動詞」『東洋研究』第87号, 大東文化大学東洋研究所  
 李 思 明 (1988) : 「《水滸全伝》“得”字的初步考察」『語言学論叢』第十五輯, 商務印書館  
 楊 平 (1989) : 「“動詞+得+賓語”結構の産生和發展」『中国語文』1989年第2期, 中国社会科学出版社  
 井上泰山 (1991) : 「『水滸伝』補語小考」『中国俗文学研究』第九号, 中国俗文学研究会  
 杉村博文 (1992) : 「可能補語の考え方」『日本語と中国語の対照研究論文集』, くろしお出版  
 戸沼市子 (1992) : 「『V得/V不得』について」『お茶の水女子大学中国文学会報』第十一号, お茶の水女子大学 中国文学会  
 守屋宏則 (1992) : 「『水滸』に見られる可能補語の特徴」『中国俗文学研究』第十号, 中国俗文学研究会  
 守屋宏則 (1993) : 「『水滸』中の〔動詞+“得”+形容詞〕形式」『明治大学教養論集』通巻255号, 外国文学, 明治大学教養論集刊行会  
 守屋宏則 (1996) : 「中国近世白話語法の研究: 『水滸』の補語に関する諸問題……能願動詞と可能補語の差異

- について」『明治大学人文科学研究所紀要』第三十九冊，明治大学人文科学研究所
- 蔣紹愚 江藍生 編（1999）：『近代漢語研究（二）』，商務印書館
- 江 藍 生（2000）：『近代漢語探源』，商務印書館
- 守屋宏則（2000）：「中国語文法・語彙の歴史的研究——『水滸』中の可能補語の統語論的・意味論的考察——」  
『明治大学人文科学研究所紀要』第四十七冊，明治大学人文科学研究所
- 梁 銀 峰（2006）：『漢語動補結構的產生与演變』，学林出版社

（もりや・ひろのり 経営学部教授）